

I—C—4 けいれんを主訴とした primary arachnoid cyst 手術例の検討 —自験8例の長期観察より—

鹿児島大学医学部脳神経外科

上津原甲一° 松田 一己 平原 一穂
中村 克己 朝倉 哲彦

【目的】 arachnoid cyst がてんかん原性病変の一つであることはよく知られ、診断もCT導入後比較的容易となったが、その病態像になお不明な点があり、治療方針とくに観血的治療に対するコンセンサスは得られていない。今回我々は、小児期より長く痙攣発作を繰り返した primary arachnoid cyst に限定し、cyst 開放術を施行した患者の長期経過観察を行い、その治療効果を、術前のメトリザマイドCT検索を中心とした病態像を踏まえて検討したので報告する。

【症例及び結果】 対象症例は cyst 開放術を施行した primary arachnoid cyst 8例で、内訳は男性5例、女性3例で、当科初診時年齢7～19才(平均14.4才)である。病巣部位は中頭蓋窩5例、前頭蓋窩1例、頭頂部2例。主訴は全般発作5例、部分発作3例で、けいれん発症より入院までの期間は1～16年(平均7.4年)で、術後経過観察期間は1～7年(平均3年3ヶ月)である。術前メトリザマイドCT脳槽造影を6例に施行、注入後より48時間迄に計6回の経時的測定を行い、全例にクモ膜下腔との交通を認めたが、delayed filling type 5例、early filling type 1例であった。術前脳波所見は6例が焦点性異常、1例が全般性異常であった。手術は原則として cyst 外側壁被膜除去による開放術を施行し、術中皮質誘導脳波にて epileptogenic focus を認めた際のみ焦点部位の切除を行った。術後delayed filling type の7例は全例CTにて cyst の縮小を認めたが、early filling type 1例では著変化は認めなかった。8例中6例に脳波所見の改善があり、術後の臨床経過は良好で全例に発作の軽減を認め、うち3例は3年以上発作の出現をみていない。

【結語】 けいれんを主訴とする primary arachnoid cyst はdelayed filling typeが多く、術後の長期観察より治療として cyst 開放術が有効であった。

I—C—5 頭部外傷直後のけいれん発作

浜松医科大学脳神経外科

*藤枝市立志太総合病院脳神経外科

○忍頂寺紀彰, *松前 薫, 下山一郎, *田中等太郎
植村研一

目的：頭部外傷直後におこるけいれん発作についてはすでに Jennett により頭部外傷後の秒単位の時間内に発生、いわゆる early epilepsy とは区別され、late epilepsy の発生に関与しないとされている。しかし実際には頭部外傷後の分単位或いは時間単位の経過でけいれんを起こす症例がありこれらを early epilepsy として扱うべきか検討を試みた。

対象及び方法：我々は過去7年間に浜松医科大学および関連一施設の脳神経外科において頭部外傷後2時間以内にけいれん発作をおこし収容された11例の臨床像を分析し、外傷とけいれん発生までの時間因子がその後の経過に影響を与えたかをみた。

結果：性別では男性10例、女性1例、年齢では1才8ヶ月ないし24才であり、外傷後のけいれん発生までの時間経過は、秒単位6例、分単位2例、時間単位3例となった。外傷の程度は、脳実質損傷としては軽微で、post-traumatic amnesia は最長でも12時間、focal neural deficit を認めず、意識障害もせいぜい一過性であり、CT上も血腫、挫傷など異常もなかった。入院観察期間中、11例中10例が軽度発熱を呈した。follow-up 中1例が熱性けいれんを呈した以外けいれんはなかった。

結論：小児ないし若年者において軽微な頭部外傷後におこすけいれん発作は頭部外傷後の秒単位、分単位、時間単位の経過でおこってもその後の経過に影響しなかった。